ISSUP　メルボルン短期プログラム参加報告書

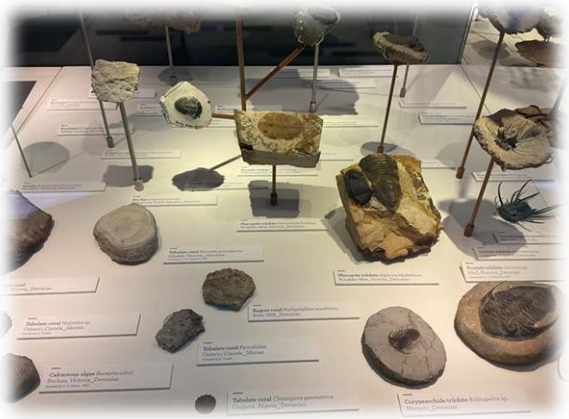
A 類理科コース　学部 1 年　西野絢音

私が本プログラムに参加した理由は、大きく 2 つあります。1 つ目は、多様性や異文化に対して理解のあるオーストラリアの学校ではどのようなことを学んでいるのか、現地の方々はどのような意識を持って生活しているのかを知り、自分の将来の理想の教員像の形成に役立てたいと考えたからです。高校生のときはコロナ禍で海外に行けませんでしたが、自分が将来どんな教員になりたいのか明確にするために、海外の教育現場や生活を見る機会が欲しいと考えました。2 つ目は、日本で LGBT をはじめとしたマイノリティに対する差別意識をなくすために、どのような教育をしていくべきか学びたいと考えたからです。日本人はマイノリティに対して差別的な考えを持っている人も多いですが、国際化や多様化が進むなかで他民族との関わりやマイノリティを含んだ他者への理解は必ず必要になってきます。オーストラリアは同性愛者の結婚が認められているなど、差別意識がとても低く、それには歴史的背景や現地の教育方法も大きく関わっていると考えました。オーストラリアの教育を実際に見て、日本の教育でも差別のない社会をつくるためにどうアプローチすべきか考えたいと思い、今回のプログラムに参加させていただきました。

今回の留学プログラムで 1 番学んだことは、オーストラリアと日本では教育の目標が違うということです。日本は学歴を重視し、義務教育の段階でも次のステップの学校に行くための授業をしているため、最終的な目標が社会に貢献できる人材育成のような印象を持つことがありました。一方オーストラリアの教育は、個人のアイデンティティの形成を目標にしています。今回オーストラリアの Primary school の授業を拝見させて頂いたときに、教科書を使わず話し合いや実技をメインに授業を行っていることに驚きました。間接的に生徒自身で考え行動させて自分に必要な知識を得ていく方法での授業の利点は、個人の能力の向上に寄り添えること、障がいのある人でも学校に行きやすいことです。さらに小さい頃からディスカッションをすることで自分の経験から意見をまとめることができるだけでなく、様々な意見があって良いという縛りのない思想を形成することができると考えます。この教育方法は様々な人種の人が集まるオーストラリアが自分のアイデンティティの確立を目標にした結果成り立っているため、そのまま日本に当てはめることは難しいですが、現代の日本でもアジアを中心とした様々な国から移住する人が増えており、自分のあり方に疑問を持つ人が増える可能性が高いため、このような個々の能力の向上に合わせた実践的な授業も取り入れていくべきと考えました。

美術教育については、National Gallery of Victoria で絵を見たり、実際に絵を描いたりして絵画や絵画を教える方法について学びました。今回人物がどんな行動・感情をしているか、背景はどのような構図かをピカソの絵を見ながら考えて、絵を見るときの自由な発想の大切さと作者の思いをくみ取る面白さを学びました。例えば絵画の女性が一目見て悲しい思いをしていると分かっても顔のパーツや背景を順番に見ることで、どこから悲しさが浮き彫りになっているのか、他の怒りやショック、楽しさなどの感情はあるかなど、一つの絵を色々な方面から深く考えられるようになります。他にも、一つの顔に悲しい様子の目・楽しい口・活発な髪など色々な表現のパーツを合わせた絵を描く体験では、表現の仕方は人それぞれということを身に沁みて感じました。クレヨンの模様や色を使って場所を表現する体験では、サラ先生が興味を持って質問をして下さったので、どんな表現をしても受け入れてもらえる安心感が持てました。私は今まで自分の発想を伝えることに恥ずかしさを感じることがありましたが、この体験を通して表現し、自分の発想を共有することは新しい知見に繋がるということを学びました。美術は教科の中でも特に教えにくい科目だと考えていましたが、今回サラ先生がして下さったように、生徒の自由な発想を肯定したり生徒間で作品の共有をしたりすることで、表現の自由の大切さを学べる素晴らしい教科になると考えることができました。

また、メルボルン博物館の展示もとても印象に残りました。メルボルン博物館にはアボリジニや大陸のことについての展示がありました。この博物館にはアボリジニの方々が狩猟や祭祀のために使っていた物品や迫害されたときの感情、主張についての展示が多くあり、当時の生活の仕方や場所が失われるまでの歴史を当事者になったかのように見ることができました。大陸についての展示からは、大きな大陸が後のニュージーランドと南極、そしてオーストラリアに分かれ、その間に生態系がどう変化したのかを学ぶことができました。私は理科専攻ということもあり、世紀ごとに起こった気候変動の映像や生息していた生物の化石の展示、実際に石を触われるコーナーなどが興味深かったです。高校の理科の授業は座学がメインでしたので、このような博物館に訪問して実物を見るなどの方法も有効活用すべきと思いました。



メルボルン大学やモナッシュ大学にも訪問することができました。メルボルン大学を訪問したときに数人の学生に LGBT について聞いたところ、LGBT と呼ばれる方は性的指向が違うだけという認識で仲がいい人がそれに該当しても受け入れることができる、そのことをオープンにしている人も沢山いるという返答がありました。私は今まで LGBT を含めたマイノリティについての授業をもっと展開していくべきと考えていましたが、この話を聞いて、現地ではそのような教育の必要もないほどマイノリティに対する理解が行きわたっているのだと感じました。そこでいま日本に一番必要な教育は、マイノリティに対する知識よりも、周りの人が違ってもそれでいいという事を受け入れることができる寛容さではないかと考えるようになりました。今後は生徒一人一人が違うことを肯定できる学級を作るために、授業だけではなく、普段生徒と接する所からどう伝えることができるのかを考えていきます。

この留学プログラムを経て、英語を話すことは世界各国の人と話す 1 番の方法ということを身に染みて感じたため、コミュニケーション英語力の向上に努めようと考えるようになりました。また、各国の教育の特徴やそれによる影響を照らし合わせて、日本の教育方法を今後どう変えるべきか考えていこうと思いました。色々なルーツを持つ人と関わる多民族国家のオーストラリアにとって、今回拝見させて頂いた教育方法は自分の能力を伸ばすことに役立っていました。一方、部活動によるスポーツ力の向上や知識を優先して得る学習方法による専門性の高さは、日本の教育がもたらしたものだと考えられます。今後の日本の教育は、良い部分を残しながら多様化にあわせたものへと変化させていくことが必要になると思います。私はこの経験をもとに、将来生徒個人の能力を伸ばせる教員になるために、日本の教育が及ぼしている影響を分析し、今の教育に足りないものをどう補えばいいか考えていきます。